

楽曲紹介

解説=宮澤淳一

5/31 | 6/1

ボロディン(1833-1887)

歌劇『イーゴリ公』より「だったん人の踊り」

アレクサンドル・ボロディン(1833-1887)は「ロシア五人組」のメンバーである。ペテルブルク医科大学の教授も務めた化学者で、寡作ではあったが、作品には積極的にオリエンタル(東洋的)な要素を取り入れた(ただし民俗学的な採集に基づくわけではなく、想像上の「東方」を彩り豊かに描いた)。

代表作は、歌劇『イーゴリ公』(全4幕)である。実は18年をかけた遺作(未完)で、リムスキー=コルサコフとグラズノフによって完成され、死の3年後に初演された。原作は中世ロシア文学の傑作『イーゴリ軍記』であり、1185年、実在の君主イーゴリが東方の異民族(ポロヴェツ人)の討伐遠征をして負けた史実に基づく。第2幕の末尾では、敵陣の虜囚となったイーゴリ公とその息子の前で、歌と踊りが次々に披露される。その音楽が「ポロヴェツ人の踊り」である。日本では「だったん人の踊り」の通称で知られてきたこの音楽は、独立した管弦楽曲として(時には原曲どおりに合唱も伴って)世界中で親しまれている。

情感豊かに音楽は始まり、オーボエ独奏がしんみりとした旋律を導く。娘たちの踊りを伴う「私たちのふるさとの歌よ、風の翼でふるさとまで飛んで行け」という歌詞の望郷の歌だ。やがて男たちの軽快かつ激しい舞踏の音楽となる。いったん静まり、力強い3拍子でポロヴェツの君主コンチャクハーンの威光を讃える音楽(もとは合唱)が厳かに響く。その後、少年たちの軽快な舞曲を経て、最初の望郷の調べが戻ってくる……。これらの要素が再統合されて盛り上がり、音楽は華やかに終わる。

[作曲年代] 1869~70年、1874~87年

[初演] 1890年10月23日ペテルブルク、マリインスキー劇場

[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2(2番はイングリッシュホルン持ち替え)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケン)、ハープ、弦楽5部

シヨスタコーヴィチ(1906-1975)

ヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調 Op. 77

20世紀ロシア(ソ連)の作曲家ドミトリー・シヨスタコーヴィチ(1906-1975)は特殊な存在だ。革命とその後の混乱の時代にあつて、体制からの批判や圧力にさらされながらもそれに耐え、大作曲家としての地位を保った。

2曲あるヴァイオリン協奏曲は、ともに名手ダヴィッド・オイストラフ(1908-1974)のために書かれた。1947年夏に着手されたこの第1番は、翌48年3月24日に完成され、「作品77」となった。しかし、同年初頭より「退廃的でブルジョワ的な形式主義」のレッテルによる音楽家たちへの糾弾が始まったため(「ジダーノフ批判」)、シヨスタコーヴィチはこの曲を留め置いた。初演は7年後の1955年10月29日、オイストラフの独奏、エフゲニー・ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルハーモニー交響楽団で行なわれ、改めて「作品99」の番号が付された(今日ではもとの「作品77」に戻されている)。

4楽章構成。**第1楽章**「夜想曲」(モデラート、イ短調、4/4拍子)は、導入部をもつ三部形式(A→B→A)で、重苦しくも抒情的な音楽が展開していく。**第2楽章**は「スケルツォ」(アレグロ、変ロ短調、3/8拍子)。「冗談」や「戯れ」を意味するこの音楽は、ソナタ形式にのっとりながら、各種の管楽器との絶妙な掛け合いを繰り広げる。途中でシヨスタコーヴィチ本人を表わす音型「DSCH」(レミ♭-ド-シ)も織り込まれている。**第3楽章**「パッサカリア」(アンダンテ、ヘ短調、3/4拍子)は、厳かなファンファーレ風の主題で始まる9つの変奏曲である。最後に長大なカデンツァが置かれ、休みを入れず終楽章に突入する。**第4楽章**「ブルレスク」(アレグロ・コン・プリオ、イ短調、2/4拍子)は、主題が反復されるロンド形式である。題名の原義は「悪ふざけ」であり、諷刺的なコントのように捉えればよい。けたたましい音楽である。

【作曲年代】1947~48年 【初演】1955年10月29日レニングラード

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(3番はイングリッシュホルン持ち替え)、クラリネット3(3番はバスクラリネット持ち替え)、ファゴット3(3番はコントラファゴット持ち替え)、ホルン4、テューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、タムタム、シロフォン)、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部

ショスタコーヴィチ (1906-1975)

交響曲第5番 二短調 Op. 47 『革命』

ショスタコーヴィチは15の交響曲を残した。『革命』の副題でも知られる第5交響曲は彼の波乱の生涯と創作活動の諸問題をも体現する代表作である。

1936年1月28日、ソ連共産党機関紙『プラウダ』に「支離滅裂にて音楽にあらず」という記事が載り、ショスタコーヴィチは新作オペラと作曲姿勢を攻撃される。これを危機と捉えた彼は翌37年4～7月にこの第5交響曲を作る。十月革命20周年を祝う12月21日、ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルがこれを初演し、大成功を収めた。自伝的な意味をもつ「抒情的・英雄的交響曲」と本人が語ったこの作品は、本心はともかく、批判への誠実な回答として当局にも認められ、彼は名誉を回復した。

第1楽章 (モデラート、二短調、4/4拍子) は、ソナタ形式 (提示部→展開部→再現部) で構成される。冒頭の厳かな掛け合いとそれに続くゆっくりとした旋律が第1主題。その後、「タンタタ、タンタタ」のリズムに乗って弦楽器が弾く、ビゼーの歌劇『カルメン』の有名な「ハバネラ」を想起させる甘美な旋律が第2主題である。これらが緊迫した世界を構築していく。最後はチェレスタの半音階的なパッセージの反復で楽章は瞑想的に閉じられる。

第2楽章 (アレグレット、イ短調、3/4拍子) は、緊迫したスケルツォで、三部形式 (A→B→A)。チェロとコントラバスによる厳かな序奏のあと、諧謔的な旋律が次々に現われ、グロテスクな様相を示す。中間部 (B) では、独奏ヴァイオリンが民族色の濃い旋律を歌う。

第3楽章 (ラルゴ、嬰へ短調、4/4拍子) は、金管楽器を除外した編成で、3つの主題をもとにした独自の形式で、精妙な美の世界が展開する (肅清の犠牲者に対するレクイエムとする解釈もある)。

第4楽章 (アレグロ・ノン・トロppo、二短調、4/4拍子) では、ティンパニのリズムに乗って金管楽器が粗暴に「ラ、レー、ミー、ファー」と吹き鳴らす (主要主題)。そのあとに八分音符の刻みのリズムを背景に木管と第1ヴァイオリンがあわたしく駆け抜けていく (副主題)。これらの素材を起点としてこの楽章は構築される。途中には抒情的かつ瞑想的な場面などもあるが、最後は弦と木管が執拗に反

復する「ラ」の音を背景に、圧倒的なファンファーレが鳴り響いて終わる。

確かにこの交響曲は、苦悩を克服し歓喜に到るプロセスを描いたベートーヴェンばりの音楽ともとれる。そうした「楽天主義的」な演奏解釈や聴取態度は否定されるべきではない。しかし作曲当時のスターリン政権下では肅清が激化し、ショスタコーヴィチの親族、友人、仕事仲間が次々に逮捕・処刑されていた。そんな状況で「歓喜」を歌う音楽など本当に書けようか。死の4年後の79年に西側で発表されたヴォルコフ編『ショスタコーヴィチの証言』（水野忠夫訳、中公文庫）は日本のファンにも衝撃的だった。第5交響曲の主題は「強制された歓喜」だと記されていたのである。

また、近年知られるようになったのが、『カルメン』の「ハバネラ」の引用の問題である。前述のように、第1楽章第2主題は、恋の気まぐれを語るカルメンが「ラ、ムール、ラ、ムール……」（L'amour, l'amour....; ああ恋、ああ恋とはね……）と歌う箇所を想起させるのであり、この歌のアクセントとなる「プラン・ガル・ダ・トワ！」（Prends garde à toi!; 気をつけなさい!）は、第4楽章冒頭の「ラ、レー、ミー、ファー」と重なる。ここで1934~36年に作曲者と愛人関係にあった女子学生エレナ・コンスタンチノフスカヤの存在が浮かびあがる。のちに逮捕・釈放されてからスペインでローマン・カルメンという映画監督と結婚したのだ。しかも愛称はリャーリャであり、終楽章末尾で反復される「ラ」の音（ロシア語読みは「リャ」）が彼女を示唆するとの説も加わる（この音は「ヤー（私）=ショスタコーヴィチ」を指すとの見解もある）。——ショスタコーヴィチの音楽とそのメッセージをめぐる議論は今後も尽きないであろう。

【作曲年代】1937年 【初演】1937年11月21日レニングラード

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、エス(E♭)・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部

みやざわ・じゅんいち／青山学院大学総合文化政策学部教授。著書に『グレン・グールド論』（春秋社・吉田秀和賞）、共著に白石美雪編『音楽論』（武蔵野美術大学出版局）など。訳書に『リヒテルは語る』（ちくま学芸文庫）、『改訂新版 音楽の文章術』（共訳、春秋社）など。